

# 北海道の産業

～北海道の農業・漁業・エネルギー～

北海道北斗市立大野中学校 山岸申弥

### はじめに

本稿は、地理教科書「中学生の地理 初訂版」3部1章「資源や産業の特色をとらえよう」の単元についての授業案である。北海道でさかんな産業を中心に、具体的な例を取り上げてみた。

「身近な地域」の学習や、「北海道地方」の学習などでも使っていただけるように、「資源や産業」を「農業」「漁業」「石炭」の3つに分けた授業案とした。

日本において、農業や漁業をめぐる状況はめまぐるしく変化し、鉱産資源の分野では石炭産業は転換を余儀なくされている。現在社会科で学習している内容は、子どもたちが社会で活躍する時代には変化をとげているかもしれない。だが、中学校での学習はきっと将来役立ち、社会で生きていくものと期待したい。

## 2 北海道の農業について

北海道の農業生産額は、2004年の統計で1兆円を超えており、北海道民に対する食料自給率は200%を超えている。教科書や地図帳の図版と自作資料を活用することにより、北海道の農業の活気ある姿に迫る。

### <酪農>



ロールベールラップサイロ  
～北海道鶴居村～

上の写真はいったい何だろうか？

まず、導入部分でこの写真を提示したい。なんだかわからない写真について、班ごとに話し合わせたり、子どもたちの知的好奇心を喚起しながら徐々にヒントを与えることにより「わかる」ものにしていく。

話し合い活動の途中で、この写真の撮影地が北海道の東側であるというヒントを与えたり、これで牛を育て、いずれ乳製品ができることを伝えながら、授業に活気を持たせる。

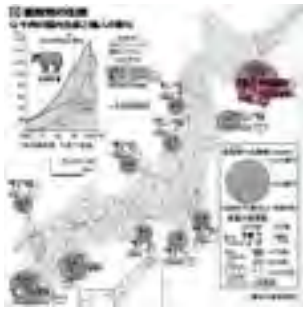
ロールベールラップサイロの中身は、地図帳p.110の⑥図にある「刈り取った牧草のか



牛が多い道東地域 地図帳p.110

たまり」である。

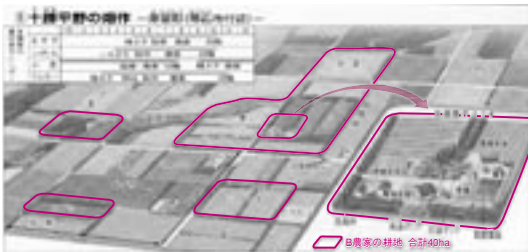
特大のラップに半乾燥の牧草を入れることにより発酵が促され、良質な牛乳のもととなる。酪農家にとっては省力化が図られるというメリットがある。



④畜産物の生産 地図帳p.120

地図帳p.120の④図を見ながら、なぜ北海道は酪農がさかんであるのかを考えさせる。牛も人間もともに生きていくための酪農業であることを、このサイロの写真を通して伝えたい。

<畑作>



地図帳p.110 ⑤十勝平野の畑作

子どもたちにあまりなじみのない単位ha（ヘクタール）の広さを考えさせ、北海道の畑作が大規模に行われていることをとらえさせる。本校を例にあげてみる。

学校の敷地面積は約 38,000km<sup>2</sup> である。これは 3.8ha と同じである。この面積のすべてを耕すとしたら、どうだろうか？

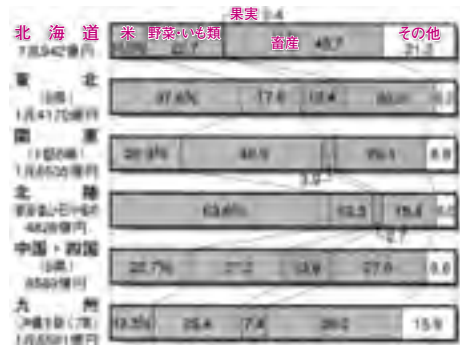
<実際に出た子どもたちのおもな意見>

- ・広いので手で耕すのは無理である。
- ・とても大変そうだ。

そのような感想を持ったところで、地図帳

p.110「十勝平野の畑作」を提示。十勝平野では、学校の敷地の10倍以上の畑を所有している農家があり、大規模に農業が行われていることを実感させたい。

また、北海道の農業のまとめとして以下のグラフを使い、資料活用能力を見てみよう。



教科書p.200 ②おもな農業地域の農業生産額の内訳

この資料から、北海道の農業の特色をまとめてみよう。

- 北海道のグラフに着目して
  - ・北海道の生産額について、
    - 北海道だけで1兆円を超えている。
  - ・生産内訳を他地域と比較して、
    - 北海道ではいたる所で水田が見られるが、生産額に占める割合は高くない。
    - 畜産が占める割合が高い。
    - 果実は少ない。
- 詳細は割愛するが、農業や酪農業が抱える課題についても、調べ学習でとらえさせる。

### 3 北海道の漁業について

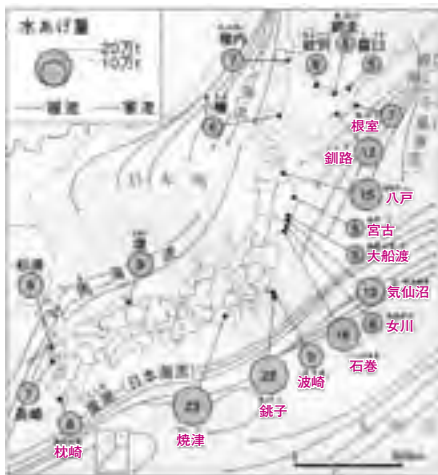
北海道庁HP「データでみる北海道の水産」(水産林務部総務課)によると、2006年における北海道の海面漁業・養殖業生産量は139万tとなっており、全国生産量の約25%を占

めている。また、生産額は2,939億円で全国の約19%を占めている。全国の12.5%の海岸線を有する北海道は、生産量・生産額ともに全国一位である。

排他的経済水域の設定による北洋漁業の衰退や、魚の消費量の減少など漁業を取り巻く環境は厳しいものになっている。そのような中で、育てる漁業は漁業者の努力が実り、生産量は増加傾向にある。



地図帳p.108 日本海と太平洋に面する八雲町



教科書p.209 ⑨おもな漁港の水あげ量



教科書p.209 ⑩日本の漁業形態の変化

この地図で八雲町が日本海と太平洋に面している唯一の町であることを認識させ、以下の資料を提示する。

この資料を見て、気づいたことをあげてみよう。

- ・太平洋側と日本海側水あげ量のちがいに気づく。(小学校での既習内容)

太平洋の水あげ量が多いのはなぜだろうか？

- ・親潮、黒潮の潮目で、プランクトンが豊富で、魚が集まるから。

日本海と太平洋に面している北海道八雲町の漁業の特色はなんだろうか？

＜八雲町のおもな水産物＞

- ・八雲町八雲地域 [太平洋側]  
ホタテ (養殖)、サケ (栽培漁業)、ポタンエビ・カニ (沖合漁業)
- ・八雲町熊石地域 [日本海側]  
アワビ・ウニ (養殖)、スケソウダラ・イカ (沖合漁業)

教科書p.209の「日本の漁業形態の変化」も並行して見せながら、八雲町もそうであるように、日本の漁業の重点が「育てる漁業」になっていることをグラフから読み取らせる。さらにここで伝えたいのは、熊石地域のア

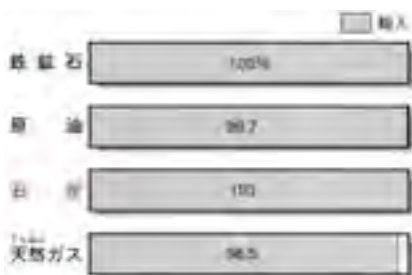
ワビについてである。アワビは低水温、富栄養の海洋深層水で育てられている。誌面の都合で、詳細にふれることができないのは残念であるが、熊石地区のアワビの養殖業に携わっている人々は、きれいな水を維持するため、自然環境の保全を強く意識している。子どもたちにとって、漁業と環境保全については関連づけにくいかもしれない。今後も海面養殖業を発展させるためには、山・川・海をきれいに使う必要があるということは、全国共通の概念である。実生活でよりよい行動を実践できる子どもを、社会科の授業で育てたい。

## 4 北海道の鉱業

1960年代、北海道や九州などを中心に、日本各地で石炭の採掘が行われ、国内炭の生産がさかんであった。エネルギー革命により高価な国内炭の需要が落ち込み、日本では釧路市のみで採炭事業が行われている（個人事業は除く）ことは周知の通りである。

北海道内の産業構造の変化から、鉱産資源を外国に依存し、人々の生活の維持のため産業の転換をはかったり、地域の人口減につながっていることに気づかせる。

次の資料の中に、北海道で生産が行われていたものがある。どれだろうか？



教科書p.185 ⑤日本のおもな資源の輸入依存度

- ・ 答えは石炭であり、北海道ではかつて多くの炭鉱があったことを教える。

この資料から読み取れることは何だろうか？

年代	北海道の第2次産業従事者	北海道の鉱業従事者
1975 (昭50)	638,471	31,214
1985 (昭60)	616,489	21,226
1995 (平7)	658,540	7,170
2005 (平17)	495,496	2,952

<資料>北海道の第2次産業と鉱業従事者の変化 (各年国勢調査より)

- ・ 鉱業に従事する人は30年間で約10分の1に減少している。
- ・ 石炭の国内生産が行われなくなったことと、鉱業従事者の減少には関連がある。

石炭を採掘しなくなったことにより、産炭地域はどのようなになっているのだろうか？

- ・ 地図帳の人口のページから北海道の「ミニ市」の多くが産炭地であったことを理解させる。
- ・ 地図帳p.111~112より、かつての産炭地夕張市でメロン栽培がさかんになり、産業転換が進んでいることを理解させる。

## 5 おわりに

資源や産業の特色を学ぶために、北海道に特化した授業案としてみたが、教科書や地図帳の図版や資料を、子どもたちの実生活と関連づけて指導すると、より効果的になるものとする。少しの工夫が子どもの力を伸ばすのだと実感した。